

## 認知症当事者による認知症サポーター養成講座が 地域づくりに果たす役割

研究分担者 横山 由香里（日本福祉大学社会福祉学部准教授）  
研究協力者 鬼頭 史樹  
（名古屋市社会福祉協議会名古屋市認知症相談支援センター）  
研究協力者 金治 宏（中京学院大学経営学部准教授）

**研究要旨：**認知症当事者の講義によって、聞き手の意識が変容し、認知症にやさしいまち指標にも変化が生じるのかを定量的に明らかにすることを目的に、講義の前後に調査を行った。公立中学校1年生24名、福祉系大学1年生34名を対象に調査を行った結果、「③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。」「⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。」という項目で、認知症への理解が有意に深まっていた。地域を変えていく役割を認知症当事者が担うことの重要性が確認できた。

このような指標を活用しながら効果的な働きかけを検討していくことは、認知症にやさしいまちづくりの促進に資すると考えられる。

### A. 研究目的

現在、全国各地で認知症サポーターが養成されている。認知症サポーターとは、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対して、できる範囲で手助けする役割を担う者である。全国キャラバンメイト連絡協議会によれば、2018年12月31日時点で、11,101,518人が養成されている。認知症の人と家族を支える認知症サポーターになることで、認知症になっても安心して暮らせるまちへと変化していくことが期待されるが、実際に、認知症にやさしいまちにつながっているのかを定量的に検討した調査はほとんどない。

今後、地域づくりを一層推進していくためには、様々な取り組みを評価し、PDCAサイクルを回していくことが重要である。こうした評価の一助となるツールとして、本研究班では2016年度に「認知症の人にやさしいまち」の指標を開発した。そこで2018

年度は、認知症の人にやさしいまちを目指した取り組みにより、これらの指標に変化が生じたかを評価することとした。

本研究で評価対象とした取り組みは、認知症当事者による講義である。学校で行われた講義や認知症サポーター養成講座において、当事者が話すことにより、認知症の人にやさしいまちの指標に改善が認められるのかを検討することとした。

また、本研究の評価対象とした取り組みはもう1つの特徴がある。それは、認知症当事者が講師を務めるという点である。名古屋市では、認知症サポーター養成講座の講師役（キャラバンメイト）として、認知症当事者が活躍している。WHO(2012)は、認知症の政策、計画、戦略において、保健医療提供者、介護者、そして認知症を患う人々が協議に関与する必要性があることを示しており、地域を変えていく役割を認知症当事者が担うということにも意義がある。

以上から本研究では、認知症当事者の講義によって、聞き手の意識が変容し、認知症にやさしいまち指標にも変化が生じたのかを定量的に明らかにすることを目的とした。

## B. 研究方法

### 1. 対象

A 県にある福祉系大学 1 年生（24 名）ならびに、公立中学校 1 年生（34 名）を対象とした。

### 2. 方法

2018 年 10 月に、授業の一環で当事者が語る講義を実施した 2 校において、講義前後に、集合法による質問紙調査を行った。

講義は、認知症の症状や患者数といった基礎知識を伝えたのち、認知症当事者が自身の経験や思いを語るという流れで行った。

当事者の講義の内容は、主に、「認知症によってどのような場面で生活に支障が生じるのかを具体的に紹介する内容」、「最初は病気を隠したいと考えていたが、助けを求めることで気持ちが楽になり、今は前向きに生きているという変化」、「認知症によってできないこともあるが、できることもたくさんあることを知ってほしいという思い」、「サポートといっても特別なことをする必要はなく、少し手助けしてもらっただけでもうれしいというメッセージ」などが含まれていた。

### 3. 調査項目

受講前、受講後それぞれで聴取した項目を以下に示す。

#### 1) 受講前、受講後

「認知症にやさしいまち」の指標として本研究班で開発された 6 項目を用いた。

各項目は以下の通りである。

- ①自分が認知症になったら、周りの人に助けをもらいながら自宅での生活を続けたいと思いますか。
- ②悩みがあるときやストレスを感じたときに、誰かに相談したり助けを求めたりすることは恥ずかしいことだと思いますか。
- ③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。
- ④認知症の人の大声や暴力、歩き回るなどの行動は、必要なことが満たされない時に起きると思いますか。
- ⑤認知症の人は、記憶力が低下し判断することができないので、日々の生活をこちらで決めてあげる必要があると思いますか。
- ⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。

いずれも「1. そう思う」～「5. まったくそう思わない」の 5 件法で尋ねた。

#### 2) 受講前

性別などの他、受講の前段階でどの程度、認知症との関わりがあるかを把握するために、認知症サポーターに配布される「オレンジリングを知っているか」、「周囲に認知症の人がいる（いた）か」、「認知症の人とのかかわりがあるか」を尋ねた。

#### 3) 受講後

①自分にできることを考えたいという思い、②自分にもできることがあるという思い、それぞれについて、「1. 弱くなった」～「5. 強くなった」で尋ねた。

#### 4. 分析

2 時点間の比較（講義の前後の比較）では、Wilcoxon の符号付順位検定を実施した。有意確率は  $p < 0.05$ （5%）とした。

（倫理面への配慮）

調査は研究目的で実施するものであり、成績評価には用いないこと、参加は自由意思であること、参加しない場合や途中あるいは調査終了後に同意を撤回した場合にも不利益は生じないこと、回答したくない質問には回答する必要がないこと等を説明した。調査は、中京学院大学経営学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 18N01）。

## C. 研究結果

### 1. 対象者の属性（表 1）

男女比はほぼ同等であった。認知症サポーターに配布されるオレンジリングのことを知っているという回答した者は、大学生で 25.0%、中学生で 17.6%であった。福祉系大学生は、家族や親族に認知症の人がいる（いた）者が約半数を占めた。また、公立中学校では、認知症の人との関わりが「全くない・ほとんどない」という回答が 81.8%にのぼった。他方で福祉系大学では、「全くない・ほとんどない」という回答は 25.0%であり、「少しある」が 54.2%、「たくさんある」が 20.8%であった。

### 2. 聞き手に生じた変化（表 2）

表 2-1 に大学生における受講前後の変化を示す。認知症の人にやさしいまち指標 6 項目のうち、3 項目において、受講前後で有意な改善が認められた。

有意差が認められたのは、「①自分が認知症になったら、周りの人に助けてもらいながら自宅で生活を続けたいと思いますか。」

「③認知症の人でも地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。」

「⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。」であった。

表 2-2 に中学生における受講前後の変化を示す。認知症の人にやさしいまち指標 6 項目のうち、2 項目において、受講前後で有意な改善が認められた。

有意差が認められたのは「③認知症の人でも地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。」「⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。」であった。

表には示していないが、受講後、「①自分にできることを考えたいという思い」「やや強くなった」「強くなった」という大学生はそれぞれ 33.3%、50%であり、中学生はそれぞれ 41.2%、47.1%であった。「②自分にもできることがあるという思い」は、「やや強くなった」「強くなった」という大学生がそれぞれ 50.0%、37.5%であり、中学生はそれぞれ 32.4%、61.8%であった。

## D. 考察

認知症の当事者による講義を聴いた後、認知症の人にやさしいまちの指標に変化がみられるかを検討した。

本研究の対象者では、オレンジリングの認知度が中学生で 17.6%、大学生で 25.0%であった。4~5 人のうち 1 人がオレンジリングを知っているということになる。他集団との比較は難しいが、福祉に力を入れている中学校や、福祉系の大学で実施したために、講義前から認知症に詳しい学生が多くいたことも予想される。認知症の人が周囲にいる（いた）者や、認知症の人と関わる機会がある者は、福祉系大学生に多かつ

た。福祉系大学生では認知症に関心を寄せている学生が多く含まれていた可能性がある。

認知症当事者による講義の前後で、認知症の人にやさしいまちの指標の一部に有意な改善が認められた。中学生、大学生共に改善していたのは「③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。」「⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。」の2項目であった。

当事者は講義の中で、「認知症によってできないこともあるが、できることもたくさんあることを知ってほしいという思い」を語っており、項目③の「認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良い」と考える者が増加したと考えられる。また、当事者が「最初は病気を隠したいと考えていたが、助けを求めることで気持ちが楽になり、今は前向きに生きているという変化」や「サポートといっても特別なことをする必要はなく、少し手助けしてもらっただけでもうれしいというメッセージ」を伝えたことで、項目⑥の「家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしい」という考えが高まったのではないかと考えられる。

「①自分が認知症になったら、周りの人に助けをもらいながら自宅での生活を続けたいと思いますか。」という項目については、大学生のみで変化があり、講義前には否定的な反応であっても、講義後に肯定的な考えが増えていた。中学生では、大学生と比べて講義前の否定的な反応がみられず、講義後にも有意な差はみられなかった。中学生においては自分が認知症になるというイメージがしづらかったことが影響しているかもしれない。

以上のように、本研究では、当事者による認知症サポーター養成講座等の講義が認

知症にやさしいまちづくりにつながっていく可能性が示された。

本研究の意義は次の2つであると考えられる。第一に、認知症のひとにやさしいまち指標を用いた介入評価の一例を示したことであり、第二に、認知症啓発の際にも認知症当事者と共に取り組むことで人々の理解が深まる可能性が確認できたことである。認知症の講義では、症状や生活上の困難が印象付けられることも少なくない。しかし、認知症があってもできることがたくさんあり、前向きに生きている当事者が発信することにより、イメージの転換を図ることも可能と考えられた。当事者と協働しながら、啓発活動をしていくことも有用と考えられる。

他方で、本研究にはいくつかの限界もある。まず、本研究は前後比較であり受講直後に評価したものである。そのため、受講による継続的な効果や、実社会での行動変容等は検証できていない。さらに、当事者による講義も多様であり、内容によって、結果が異なる可能性もある。

今回用いたような指標を活用しながら、効果的な働きかけを今後も検討していくことが必要と考えられる。

## E. 結論

認知症当事者の講義によって、聞き手の意識が変容し、認知症にやさしいまち指標にも変化が生じるのかを定量的に明らかにすることを目的に、講義前後の比較を行った。

公立中学校1年生24名、福祉系大学1年生34名を対象に調査を行った結果、「③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思いますか。」「⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思いますか。」という項目で、認知症への理解が有意に深まっていた。

このような指標を活用しながら効果的な働きかけを検討していくことは、認知症にやさしいまちづくりの促進に資すると考えられる。

## **F. 研究発表**

### 1. 論文発表

特になし

### 2. 学会発表

「当事者の力を考える—認知症当事者が語る意義とその教育的効果—」

日本福祉教育・ボランティア学習学会

第24回あいち・なごや大会

2018年11月25日（日）

## **G. 知的財産権の出願・登録状況**

### 1. 特許取得

特になし

### 2. 実用新案登録

特になし

### 3. その他

特になし

表 1. 対象者の属性

	福祉系大学	公立中学校
性別(男性・女性)	45.8%・54.2%	52.9%・47.1%
オレンジリング認知	25.0%	17.6%
周囲に認知症の人がいるか		
家族・親族にいる(いた)	45.8%	14.7%
近所にいる(いた)	20.8%	2.9%
認知症の人との関わり		
全くない・ほとんどない	25.0%	81.8%
少しある	54.2%	9.1%
たくさんある	20.8%	9.1%

表 2 - 1. 大学生における受講前後のスコア

	受講前		受講後		p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
①自分が認知症になったら、周りの人に助けてもらいながら自宅での生活を続けたいと思うか	3.0	1.4	1.6	0.8	*
②悩みがあるときやストレスを感じたときに、誰かに相談したり助けを求めたりすることは恥ずかしいことだと思うか	3.8	1.0	3.8	1.5	
③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思うか	2.2	0.8	1.6	0.8	*
④認知症の人の大声や暴力、歩き回るなどの行動は、必要なことが満たされない時に起きると思うか	2.7	1.1	3.1	1.0	
⑤認知症の人は、記憶力が低下し判断することができないので、日々の生活をこちらで決めてあげる必要があると思うか	3.2	1.2	3.5	1.1	
⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思うか	2.5	1.3	1.3	0.6	*

\* p < 0.05

表 2 - 2. 中学生における受講前後のスコア

	受講前		受講後		p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
①自分が認知症になったら、周りの人に助けてもらいながら自宅での生活を続けたいと思うか	2.1	1.2	1.9	0.9	
②悩みがあるときやストレスを感じたときに、誰かに相談したり助けを求めたりすることは恥ずかしいことだと思うか	3.6	1.1	3.7	1.3	
③認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方が良いと思うか	2.1	0.9	1.6	0.7	*
④認知症の人の大声や暴力、歩き回るなどの行動は、必要なことが満たされない時に起きると思うか	2.6	1.0	2.7	1.3	
⑤認知症の人は、記憶力が低下し判断することができないので、日々の生活をこちらで決めてあげる必要があると思うか	2.4	1.0	2.6	1.2	
⑥家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしいと思うか	1.7	1.0	1.3	0.6	*

\* p < 0.05